悪妻は良妻

Junko Higasa

「哲学者になるには悪妻を持つことだよ」という言葉があるが、それは単純にのんびりした生活からは何の発展も生まれないということだと思う。真の悪妻を持ってしまえば哲学者どころか単純に見えない出口に悩んで日々をやり過ごす凡夫にしかなりえない。それでも人間的成長には少し役立つだろうけれど。

ところで悪妻といえば、必ず引き合いに出されるのがソクラテスの妻クサンティッペであるが、夏目漱石夫人の鏡子さんも彼女と共通する部分がある。もちろん二人とも悪妻ではない。内実を知らない周囲の人が勝手に悪妻呼ばわりしただけである。また夫：哲学を説いたソクラテスと哲学を描いた漱石にも共通点がある。ソクラテスは一日中外を回って哲学を説き歴史に名を残す多くの優秀な弟子を育てた。漱石は一日中学問に忙殺され執筆に集中し文壇に名を残す優秀な弟子を育てた。「正しい未来への教育」それが二人の共通点である。そして相違点はソクラテスが「死んだ言葉」として一切の著述を行なわなかったのに対し、漱石は著述を主流にしたということだ。

では各夫人の共通点はというと、それぞれ多くの子供を抱えて家計を遣り繰った。その間夫は仕事に集中できたというわけだ。この二人が生きた時代は女性の社会的地位はないも同然であったため、嫁ぐ女性にもそれなりの覚悟はあったろう。それでも世間一般からすれば変人扱いされるような特殊な才能を持ち、特殊な行動をする夫に添い遂げる覚悟は半端ではない。そしてその二人を支えたのは紛れもない愛である。クサンティッペは獄中のソクラテスを思って嘆き悲しみ、鏡子さんは漱石の神経衰弱による暴力に一時別居しながらも、病気のせいだと原因が分かったので添い遂げる覚悟をして戻った。その後も胃潰瘍の病状を心配して静養の手配をしたり、生まれて間もない子供を人に託して保養地へ看病に向かった。相手を思っていなければできることではない。もちろん一方通行ではない。ソクラテスも漱石も夫人を愛していた。二人ともこんな妻にさんざん文句を言ったり書いたりしながらも、内実自分を甘えさせてくれる心の拠り所としていた。つまり二人の夫人は彼女たちでなければ務まらなかった。天才の才能の恩恵は彼女たちの愛の懐なしには存在しなかっただろう。ソクラテスは「嫌なら別れれば」と言った人に対して「彼女とうまくやっていければ誰とでもうまくやっていけるから」と哲学に変換して答えた。漱石は胃の病気で好きな謡を医師に止められたが、回復してきたとき「医者もいいと言っているから、謡の稽古をしてもいいかな？」と病院から夫人に手紙を書いている。これが天才的な仕事をする男の甘えである。妻たちは夫の激烈な個性と共に子供のような甘えも受け止められた。だから世間の人が一般の良妻基準を振りかざして外からとやかく言うのは、あのように素晴らしい人にあの夫人では釣り合わないという勝手な外面的価値判断である。女は「何であの素敵な人に何であの程度の奥さんなの？」と嫉妬し、男は「あれほど立派な人ならもっと優秀な奥さんがもらえただろうに」と変な同情をする。

よく考えてみよう。夫婦を一つの器に見立てれば、片方が 80%なら片方は 20%でなければならない。80%と 80%だと夫婦という器には決して収まらない。(2012.9.17)